

第四編

產業經濟

目次

第一章	人口と集落	二六	七	展開と実績	三三
一	維新前の人口	二六	65	農業委員会	三三
二	明治以後の人口	二六	1	米の生産調整	三三
三	第二次世界大戦後の人口動態	二六	1	失業対策として	三五
二	産業別人口動態	二七	32	地域開拓計画	三五
四	最近の人口動態	二七	1	開拓管農のあり方	三五
五	農業人口動態	二七	4	移り変わり	三五
二	農業	二七	1	農業災害	三六
一	概要	二七	4	農作物災害	三六
二	明治維新以後	二七	1	戦後の農業政策の転換	三六
321	第二次世界大戦当時	二七	1	新農山村	三六
4321	終戦後の農政	二七	1	総合対策事業	三六
1	新しい農政	二七	32	農業構造改善事業	三六
二	農用地の開発	二八	4	第三期山村振興	三七
1	徳川時代	二八	32	農業高輪者の創作館	三七
21	明治後期	二八	65	農村地域トータル	三七
321	戦中	二八	1	イフ向上対策事業	三八
4321	戦後	二八	1	海外移住	三八
1	戦道開闢	二八	1	久万町農業の実態	三八
21	戦後	二八	1	久万町農業の展望	三八
32	戦後	二八	1	林業	三九
4321	戦後	二八	1	林業総合調査と	三九
1	戦後	二八	1	林業構造改善	三九
21	戦後	二八	1	上浮穴郡林業振興協	三九
32	戦後	二八	1	議会和育林技術体系	三九
4321	戦後	二八	1	原木市場の開闢	三九
1	戦後	二八	1	久万町木材流通合理化	三九
21	戦後	二八	1	審議会発足	三九
32	戦後	二八	1	林業教育	三九
4321	戦後	二八	1	婦人林業教室	三九
1	戦後	二八	1	久万町にボタノ材	三九
21	戦後	二八	1	中核林業振興	三九
32	戦後	二八	1	地域育成事業	三九
4321	戦後	二八	1	峰越林道開通	三九
1	戦後	二八	1	久万町製材業流通	三九
21	戦後	二八	1	懇話会の発足	三九
32	戦後	二八	1	除害	三九
4321	戦後	二八	1	除害緊急対策事業	三九
1	戦後	二八	1	ふるさと森事業	三九
21	戦後	二八	1	商工業の概要	四〇
32	戦後	二八	1	合併後の商工業の概要	四〇
4321	戦後	二八	1	合併後の商工業の概要	四〇
1	戦後	二八	1	概況	四〇
21	戦後	二八	1	名勝	四二
32	戦後	二八	1	皿ヶ坂連峰	四二
4321	戦後	二八	1	古ヶ滝公園	四二
1	戦後	二八	1	古ヶ岩屋	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	四国のみち	四二
4321	戦後	二八	1	観光リンゴ園	四二
1	戦後	二八	1	ススキー場	四二
21	戦後	二八	1	美術館	四二
32	戦後	二八	1	久万公園	四二
4321	戦後	二八	1	観光協会	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
21	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
32	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
4321	戦後	二八	1	ふるさと旅行村	四二
1					

# 第一章 人口と集落

## 一 維新前の人口

もとより不完全であった当時の人口把握の制度としての戸籍制度は、徳川幕府が起るに至り、寛永年間の島原の乱の後には、キリスト教の信仰を厳禁し、毎年僧侶に人民の「宗門改め」をさせ、これを改帳する宗門改帳とそのほかに、里長、名主は、氏名、族籍、年齢及び出入増減を記帳する人別帳を調製することとなったので、平安中期より有名無実となっていたこの制度が再び回復の運びとなった。

寛保元年（1741）明治初期の人口対比

区分 村別	寛保 (1741年) 人口		明治5年 (1872年) 人口		増減数	寛保を 100と すると
	人	口	人	口		
東明神村	1,110		754		△ 356	67.9
西明神村	624		396		△ 228	63.4
入野村	305		345		40	113.1
計	2,039		1,495		△ 544	73.3

資料 寛保久万山手鑑、明治村壬申戸籍統計表

しかし、久万町では、これらの宗門記帳や人別帳は、現在大部分が消滅しているのので、当時の人口を正確に把握することは困難である。ただ「寛保久万山手鑑」により若干の考察をすることはできる。

寛永二年（一六二五）、松平家が松山藩に入国して以来、久万山郷は所領中に属し、代官出張所が久万町村に置かれていた。

寛保（一七四一）当時の行政区画、戸数、人口は表に示すとおりであるが、

寛保元年（1741）人口及び職業

区分 村別	人 口	戸 数	職 業										備 考
			農	医 師	社 人	禪 門	出 家	神 子	道 心	座 頭	山 伏	替 女	
東明神村	1,110	241	1,105									5	
西明神村	624	129	620		4								
入野村	305	66	303		2								
久万町村	1,322	191	1,304	4		3	7	1	1	1		1	
野尻村	316	73	315						1				
菅生村	1,141	227	1,124		2	1	10			2	1	1	
直瀬村	1,153	210	1,145		2	3	1				2		
上畑野川村	697	140	694		1		2						
下畑野川村	660	130	655		2		1		1	1			
計	7,328	1,407	7,265	4	13	7	21	1	3	4	8	2	

資料 寛保久万山手鑑

注 社人=神に仕える人 道心=僧侶の弟子  
 禪門=仏門に入りたる男子 座頭=盲目者（あんま）  
 出家=僧 侶 山伏=山に伏し野に伏して仏の道を修行する者  
 神子=神事を行う人 替女=ごぜ=盲の女の三絃を弾きなどして銭を乞う者

現在の大字下野尻、旧父二峰村の全域は当時大洲領であったため久万山手鑑の記録には見られない。

当時の人口を一三二三年後の明治五年と対比してみると人口の減少がはなはだ激しい。特に東明神村で、三五六人（三三%）西明神村で、二二八

人口の推移

S 10年	S 15年	S 22年	S 25年	S 30年	S 35年	S 40年 10.1日	S 45年	S 50年	S 55年	S 60年	S 63年 (9月末)
1,840	1,887	S 18. 9. 1 合併 (久万町)			14,291	12,568	10,482	9,364	8,802	8,309	8,399
3,488	3,310	7,480	7,591	7,661							
万町に合併											
3,211	3,331	4,295	4,485	4,506	S 34. 3. 31合併						
2,364	2,320	2,904	3,017	2,973							
10,903	10,848	14,679	15,093	15,140	14,291	12,568	10,482	9,364	8,802	8,309	8,399
106.5	105.9	143.5	147.8	147.8	139.6	123.6	102.3	91.5	86.0	81.2	82.0
115.2	116.6	143.8	150.6	152.4	148.5	142.6	137.9	141.2	146.5	148.7	148.4

人(三六%)減少しているのに対し、入野村において、わずかに四〇人(二三%)増加しているに過ぎない。その他の村については、明治初年の人口が正確でないため一概にはいえないが、菅生村においても明治三四年(一九〇二)と対比し、二〇六人(二八%)減少している。

これは、江戸中期に極めてひんぱんな飢饉に見舞われたことがあげられる。特に天明二年(一七八二)と七年(一七八七)のいわゆる天明の大飢饉、及び天保四年(一八三三)と七年(一八三六)の大飢饉による餓死が原因とみられる。

二 明治以後の人口

明治維新になり、大政が天皇に奉還され、そして明治四年七月、廃藩置県がなされて久万郷は石鉄県となり、旧大洲領であった父二峰地区及び大字下野尻地区は神山県となった。当時の人口の記録は、明神、父二峰地区を除き火災などのため焼失し詳かでない。

維新を経て、欧米諸国から科学技術の導入が著しく、特に医療制度の発展にともなって死亡率が低下し、また明治後期から化学肥料の発達や工芸作物の栽培などで土地生産性の向上が目立ってきた。このような環境が農村における人口増加を促す原因となった。しかし、半面において明治一〇年代の綿紡績を中心にした軽工業部門、同三〇年代の製鉄を中心にした重工業部門の動力化、機械化によって産業革命が遂行され、この産業革命の進展するに当たっての工業労働力の供給源を農村に求めたため、農民離村の現象が著しくなって都市の人口は激増したのに対し、農村人口は停滞ないし減少の傾向を示すようになった。

年次別 旧村別	M5年 本籍 人口	M13年 本籍 人口	M20年	M34年 現住 人口	M39年 現住 人口	M44年 現住 人口	T5年 "	T9年 国調	T14年 "	S5年 "
東明神村	754		835	明神村 1,988	1,981	2,146	2,172	1,908	1,888	1,941
西明神村	396	429	456							
入野村	345	367	445							
久万町				久万町 1,829	2,020	2,027	2,136	2,165	3,271	3,467
上野尻村										
下野尻村										
菅生村				935	981	999	1,067	875	T12.	2. 11久
上畑野川村				川瀬村 3,052	2,732	3,122	3,389	3,187	3,139	3,195
下畑野川村										
直瀬村										
二名村	439			父二峰村 2,433	2,559	2,671	2,691	2,355	2,364	2,377
父野川村	312									
露川村 (美川村の一部)	391									
計				10,237	10,273	10,965	11,455	10,490	10,662	10,980
M34年を100比率				100	100	107	111.8	102.4	104.1	107.2
県人口比率				100				103.5	108.5	113.0

注 明治34年～昭和30年の間は横谷の人口を含まない。

これを久万町について見ると、表に示しているように明治三四年の現住人口は一万二千三百七名であったが、大正五年には一万一千四百五十五名となつて兩年の差二千八百名名の増である。しかし、その後は停滞ないし減少を示し、第二次世界大戦終結直前まで回復することはできなかった。これを県人口と比較してみると、明治三四年を100と定めて昭和十五年が一六・六に對し、久万町は一〇五・九とその差一〇・七%減で都市部への流出に伴う人口伸長率の低下がみられる。

ところで、第二次大戦直後の昭和二十二年の国勢調査以降、戦争による食糧難、都市の荒廃等により、我が久万町人口は増加の一途をたどり昭和三〇年代前半にはそのピークに達した。しかし、都市の復興に伴う経済発展で、昭和四〇年以降、都市部への人口流出が再びはじまり、昭和五〇年には遂に、明治三四年の人口を割り、現在も人口の減少傾向、過疎化現象が進行している。

### 三 第二次世界大戦後の人口動態

昭和一八年ごろから戦争の熾烈化による都市の食糧不足、一九年の表日本主要都市の戦災による強制疎開、二〇年八月の終戦に伴う外地からの移住民の引揚げ、内外地からの軍人の復員などが原因となつて、昭和十五年一万二〇二一名であった久万町人口が、終戦時の二〇年には、一万四千八百九名に達し、更に、昭和二五年には一万五千〇八名と激増した。これは、終戦という特別な現象を契機として、過去数十年間における転出者及びその家族の多くのものが、本籍地に復帰したことを示している。

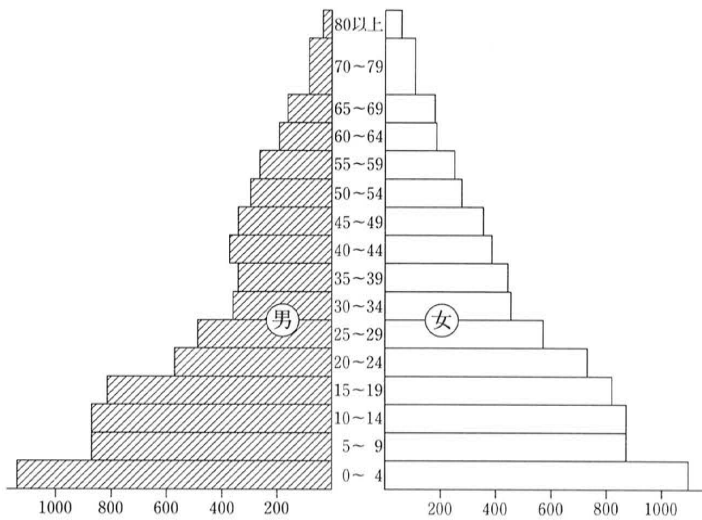
国勢調査人口

年次	世帯数	人 口		
		総人口	男	女
大 9	2,477	10,652	5,356	5,296
14	2,511	10,824	5,488	5,336
昭 5	2,488	11,145	5,614	5,531
10		11,071	5,530	5,541
15	2,259	11,021	5,532	5,489
20		14,889	7,210	7,679
25	3,160	15,308	7,509	7,799
30	3,047	15,313	7,577	7,736
35	3,248	14,291	6,953	7,338
40	3,356	12,568	6,115	6,453
45	3,071	10,482	5,005	5,477
50	3,075	9,364	4,456	4,908
55	2,986	8,802	4,205	4,597
60	2,977	8,309	3,954	4,355

その後、昭和三〇年を頂点に都市における第二次産業の飛躍的發展に伴い、人口の農村から都市への地すべりの移動が始まった。すなわち同年に一万五三一三名であったものが、四〇年一万二五六八名、五〇年九三六四名、六〇年八三〇九名と激減している。

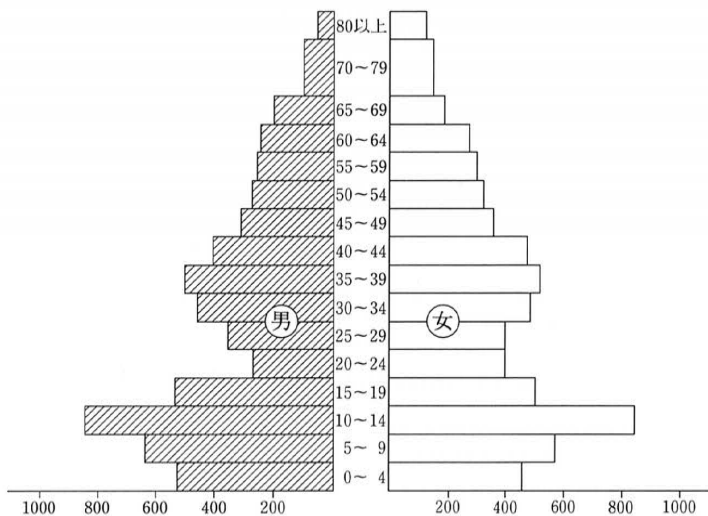
次に年齢別の人口構成について調べてみる。まず昭和二五年、同四〇年、同六〇年国勢調査の際の年齢別人口構成を図化して図に掲げているが、これによると、二五年のものは、終戦直後のベビーブームの延長で乳幼児の人口比率が高く、全体として低年齢層比率の高い、いわゆるピラミッド状の人口構成図である。これに対し、四〇年は低年齢層が激減少し、いわゆる鐘型の人口構成図となっている。二〇年後の昭和六〇年には低年齢層が激減し、キノコ型の人口構成図を示し、人口の老齡化現象がみられる。

久万町年齢階層別男女別人口構成図  
(昭和25年10月1日 国勢調査)



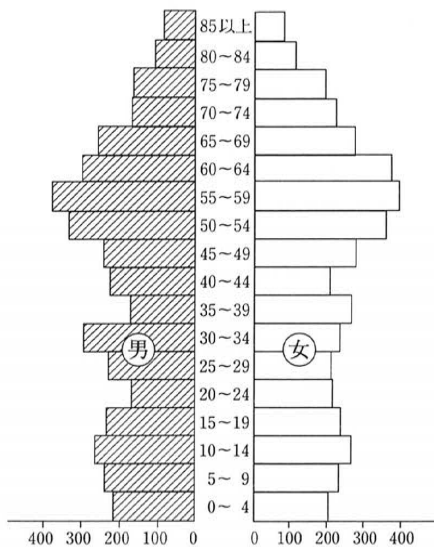
久万町年齢層別男女別人口構成図

(昭和40年10月1日 国勢調査)



久万町年齢層別男女別人口構成図

(昭和62年3月31日 国勢調査)



人口自然増減 (人口動態統計表)

種別 年次	出生児数			死亡者数		
	総数	男	女	総数	男	女
S 22年	555	269	286	255	133	122
23	577	301	276	188	101	87
24	588			225		
25	480			155		
26	486			152		
27	431			122		
28	360	187	173	136	76	60
29	371	188	183	132	73	59
30	383	199	183	141	57	84
31	359	189	170	158	84	74
32	305	154	151	163	81	82
33	302	148	154	131	80	51
34	289	159	130	129	75	54
35	250	152	98	123	72	51
40	187	94	93	121	67	54
45	120	55	65	107	59	48
50	94	52	42	91	54	37
55	86	44	42	111	54	57
60	87	44	43	85	47	38

集落別世帯数人口 (昭和40年国勢調査)

組名	世帯数	人口	組名	世帯数	人口	組名	世帯数	人口
三坂、モミノ木	23	100	福下	32	100	上河合、南狩場	56	222
高山	28	99	曙	1	48	東狩西峰新	42	161
横通	50	164	〃	2	89	上村、上田	29	91
野地	35	115	〃	3	77	西の浦	61	221
中組	53	200	辻上	71	254	宝作、岩川	44	188
皿木	37	139	辻下	64	214	明之	61	248
栄谷楨の川	43	169	上の	46	178	河之内	45	221
沖、北条	34	114	上の	62	214	小計	23	143
本上、山神	52	201	上の	56	196	瀬戸、富重	849	3,494
本殿、仰西	32	120	上の	51	187	帯石	22	98
高開、梶山	45	173	大谷	68	275	中条、上厚	28	103
槻の沢	49	180	宮の	45	143	東条、黒沢	30	145
日地の	22	83	中の	36	150	森田、由良	44	145
駄場	30	90	下の	33	143	宮成	28	114
藤の棚	45	162	小計	32	144	徳好、永久	35	146
北村	46	152	永子、房代	1,917	6,769	馬ノ地	54	252
中組上	44	149	上下	55	253	大久保	34	117
〃下	34	140	仲組	60	265	橋ノ詰	28	133
住上の	66	162	東組	52	222	西ノ川	68	229
〃1	48	140	古宮、沖	51	201	中村、中	28	113
春日台	46	141	竹屋敷、下	50	247	若宮	49	165
古日	44	155	駄場	29	117	下落合	31	104
住安下	40	140	中通、吉久	31	151	上落合	37	160
本桂町	40	128	嵯峨山、西の川	54	233	小計	45	161
桂町	48	173	柳井、西河合	30	100	榎谷	561	2,185
福上、中	35	103	東河合、住宅	35	126	合計	29	120
	38	148		31	84		3,356	12,568



産業大分類別就業者人口 国勢調査

分類 年別	第一次産業			第二次産業			第三次産業							総 数	
	農 業	林 業	水 産 業	鉱 業	建 設 工 業	製 造 工 業	ガ ス 電 気 及 水 道 業	卸 売 小 売 業	金 融 保 険 業	運 輸 通 信 業	サ ー ビ ス 業	公 務 及 団 体	自 由 業		そ の 他
22	5,104	356	7	22	207	381	22	173	18	164	91	300	232	11	7,088
	77.1%			8.6%			14.3%								
30	4,396	622		8	298	328		595	63	230	631	190			7,361
	68.2%			8.6%			23.2%								
40	3,205	260	1	42	544	320	19	696	59	255	757	183			6,341
	54.6%			14.4%			31.0%								
50	2,165	201	3	13	349	451	14	661	46	227	804	189		5	5,128
	46.2%			15.9%			37.9%								
60	1,534	192	7	20	396	562	17	635	51	190	789	213		1	4,607
	37.6%			21.3%			41.1%								

注 22、30年の数字中に榎谷を含まない。

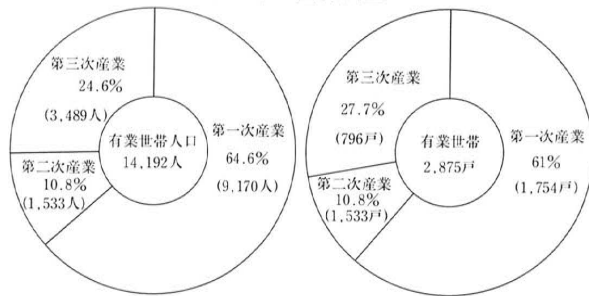
#### 四 産業別人口動態

第二次大戦後、日本経済の復興とその発展にはすばらしいものがある。特に、第二次産業・第三次産業を中心として発展は第一次産業、特に農業所得との格差を大きくし、その労働力を農村に求める結果となり、農村から都市への人口流出を刺激し、山村の過疎化に拍車をかける要因となっている。

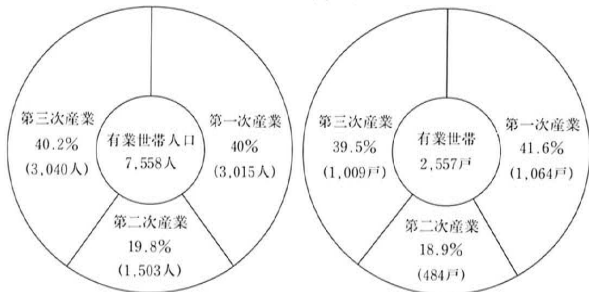
昭和二二年から昭和六〇年までの国勢調査資料から第一次産業の就業人口比率の移りかわりを一〇年単位でみると、敗戦間もない二二・七・一

産業別人口世帯数

昭和30年 国勢調査



昭和60年 国勢調査



%であるのに対し、同三〇年六八・二%、同四〇年五四・六%、同五〇年四六・二%、同六〇年三七・二%、となっており、ほぼ一〇年間に一〇%程度ずつ減少してきたことを示している。

その間、昭和二五年の朝鮮動乱、四七年に終結したベトナム戦争は米国よりの特需を増大し、第二、第三次産業の発達をうながし、好景気をもたらした。一方、第一次産業の農業経営はますます零細化の途をたどった。

一方、他産業の振興は農業所得との格差を大きくし、農業経営の規模が問題となってきた。そこで都市への縁故就職を初め、昭和三四、五年

ごろ、国の施策もあって、海外への集団農業移民、他産業への転職というように農業従事者は激しく流出していった。そのうち、一家をあげて離農していったものも多く、戦後入植した開拓農家の離農は、特に目立つものといえよう。

また、第二次産業についてみると、同二二年の比率八・六%、同四〇年、一四・四%、同五〇年一五・九%、同六〇年二一・三%と増加している。その中で建設業については、昭和四〇年を中心に国道改修工事にもなる臨時的労働者がふくまれている。

全般的に町内では兼業化、女子労働による副業化が進行している。

### 五 最近の人口動態

久万町の人口は、昭和三〇年の一万五三一人を最高として、漸減傾向にある。表に示したように、昭和三五年を一〇〇とすると三七年九七・〇、四〇年八七・五、四五年七一・八、五〇年六七・七、五五年六三・四、六〇年五九・五、六三年九月現在五七・五となり六〇年代に入って人口増減指数六〇を割っている。

現在の人口数は約八四〇〇人で明治三四年の一万二〇〇人を割り人口

久万町人口数の増減

年次	住民登録人口(12月末)	住民登録人口増減指数	備 考
35	14,600	100.0	14,291 (国勢調査)
40	12,779	87.5	12,568 (国勢調査)
45	10,482	71.8	
50	9,884	67.7	
55	9,261	63.4	
60	8,683	59.5	
63	8,399	57.5	

の過疎化が継続して、進んできたことを示している。特に、昭和五〇年以降、一〇年余りの世帯・人口動態の推移をみると毎年一〇〇人前後の人口減少がみられ、世帯当たり人口も昭和五八年、遂に三人を割り昭和六一年には二・八七人となっている。

世帯・人口動態の推移

(住民基本台帳)

年次	世帯数	人 口			自 然 動 態			社 会 動 態			世帯当り人口
		総 数	男	女	出 生	死 亡	増 減	転 入	転 出	増 減	
50	3,021	9,884	4,744	5,140	97	102	△ 5	490	653	△ 163	3.27人
51	2,998	9,726	4,691	5,035	100	107	△ 7	436	540	△ 97	3.24
52	3,002	9,622	4,646	4,976	92	101	△ 9	483	560	△ 77	3.21
53	3,010	9,554	4,626	4,928	103	23	80	410	587	△ 177	3.17
54	3,008	9,441	4,586	4,855	77	99	△ 22	350	521	△ 171	3.14
55	2,991	9,261	4,496	4,765	94	107	△ 13	443	511	△ 68	3.10
56	2,991	9,180	4,458	4,722	83	72	11	461	530	△ 69	3.07
57	3,007	9,122	4,403	4,719	83	103	△ 20	369	511	△ 142	3.03
58	2,995	8,962	4,327	4,635	97	76	21	312	481	△ 169	2.99
59	2,985	8,814	4,231	4,583	79	86	△ 7	311	435	△ 124	2.95
60	2,976	8,683	4,155	4,528	85	90	△ 5	374	457	△ 83	2.92
61	2,995	8,595	4,119	4,476	92	94	△ 2	321	421	△ 100	2.87
62	3,016	8,493	4,073	4,420							